
リトルプラム

aoneko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルプラム

【Nコード】

N4634D

【作者名】

aoneko

【あらすじ】

あなたを忘れることが出来たらどんなに楽でしょう。そばにいると苦しいのに、そばにいたい。幸せを祈ってあげたいのに、祈れない。矛盾だらけのこの気持ちが恋なのでしょう。悲しいけどなぜか愛おしい恋をしている小梅と彼女を取り巻く人々の物語。

第一話：悲しい確信

『見て、小梅。桜が咲いているよ。』

小梅が振り向くと、神社の塀から突き出た枝に、白い花が咲いていた。

『何言ってるの、温ちゃん。あれは梅だよ。ほら、梅のいい香りがするでしょう。』

『あれは桜だよ。』

少年は小さい子特有の意地を張った。

『あれは、梅。』

『桜だよ。』

『梅！』

『桜。』

『梅だってば！温ちゃんおんの馬鹿！もう知らない。』

つないでいた手を振り払うと、小梅は駆け出した。なんだか、自分の名前まで否定されたような気がして、腹が立った。

『なんだよ。』

放された手は冷たくて、口の前にかざして息をはいた。まだ、白く見える息が青空に上る。

温は、白い花をぼんやりと見つめた。

*

『俺、東京の高校を受けようと思ってるんだ。』

温は、シャーペンをクルクルと回しながら、独り言のように呟いた。

『ふん。いいんじゃない？』

小梅は、さも興味がなさそうに参考書のページをめくった。震えているのを、気づかれないように小さめの声を出す。

『冷たいじゃん。保育園から一緒なんだから、もうちょっと寂しがつてくれたっていいのに。』

温はつまらなそうに口を尖らせた。

『寂しいよ。寂しいけど、どうせ高校は別のところに行くつもりだったから、どっちでも変わらないよ。』

そう。こうなることは分かってたから、ショックを受けないようにわざと別の学校を志望した。

『美智子ママに言ったの？この前の面談では、地元の学校で話が進んでたんでしょ。』

『うん。昨日、話した。いきなりで驚いたみたいだったけど、好きにすればいいってさ。』

『そう。』

美智子ママなら言いそう。

小梅は、田舎の地主の家の人にしては珍しくタイプの温の母親を思い浮かべた。

例に漏れず、過疎化がどんどん進行しているこの地方では、長男が東京に出ることはほとんど許されない。

殊に、温は一人っ子だ。温のことだ。東京に行ったら、帰ってこないかもしれない。それでも、好きなようにさせてあげるんだ。

美智子ママのそうゆうところが好き。

跡取りの事は、温の祖父母がすでに他界していることも、大きいかもしれないが。

『どこの高校なのか聞かないの？』

温はなぞなぞを出す時みたいな顔をして、小梅を見た。期待がこもった視線が、小梅に注がれる。

『どうせ、風立大付属でしょう。』

1年前からそこしか行く気ないくせに。

『さすが、小梅。』

『さーちゃん、サークルに入ったんだって。大学すつごく楽しいみたいだよ。』

小梅はこれ見よがしに、声を張り上げた。

『か、彼氏とか出来てないよね？』

『まだ、そんな話聞いてないけど、さーちゃんかわいいからなあ。』

さーちゃんの本名は三沢 桜。小梅の三つ年上の姉だ。去年、東京の私立風立大学に入学した。

温の家と違って、保守的な三沢家は、長女の桜を東京に行かせるのを大分渋った。

大きな土地を持っているわけでもないが、先祖代々の土地を受け継ぎ、地味に暮らしてきた。

桜の上京を最も反対していたのは、祖父の宗助であった。長女は、おとなしく婿を取って家を継ぐべきだと明治なみに古臭い考え方の

持ち主だった。

結局、宗助の出した条件は私立では最難関であるといわれている風立大学への合格だった。

元々、優秀だった桜は、一年間の猛勉強の末、上京を勝ち取り今に至るわけ出る。

小梅たちの両親は最後はむしろ、応援していた。厳格な父親がいたおかげで、上京をあきらめたことのある小梅の父、明は自分のあきらめた道を

せめて娘には自分の好きな道を進んで欲しいと思ったようだ。

母親の雪江は、初めは猛反対していたが、桜の頑張りに感動し、加えて

『あたしはここが好きだからずっといるつもりだよ。』という小梅の一言で完全に賛成派に寝返った。

祖母の奈津が生きていれば、話は違っていたかもしれないが案の定、奈津は5年前に他界しており、頑固な宗助をいさめる者はだれもいなかった。

桜の上京後、意固地になりすぎた宗助は、東京にいる孫を心配する気持ちからか、張り詰めていた気持ちがふっと切れてしまったからか体調があまり芳しくない。

最近では、趣味の盆栽からもすっかり離れてしまっている。

小梅は、宗助の将棋相手になってあげるのだが、あまり慰めになっ

ていないようだ。

宗助は、小梅のことを時々「桜」と呼ぶ。

その度に、小梅が心を痛めていることも彼は知らない。

『そうだよな。さーちゃんってほんときれいでかわいくてすつごく優しくて……。 なっなんだよ！』

うつとりしていた温は、小梅のあきたような視線に気が付くと顔を赤らめた。

『え？いや。温ちゃんってほんと一途だよな。』

『お？おお。まあ、5歳の時からさーちゃん一筋だから。』

温は、照れたように頭をがりがり掻いた。

『ま、頑張ってね。風立大付属ってかなり難関でしょう。』

『うん。でも、大丈夫でしょう。』

その自信はどこから湧いてくるのか。温は余裕の笑顔を見せた。

小梅も確信があった。きつと彼なら、受かるだろうと。

悲しい確信。

小梅は目の奥に溜まって溢れてきそうな涙をぐっところえていた。

第一話：悲しい確信（後書き）

今書いている連載で起きている迷走の鬱憤を晴らすため、書いてみました。更新はゆっくりだと思いますが、よろしければ読んでみてください。

第二話：志野

『はつくしゅん！』

河野 温^{あつし}は体を震わせた。

足元に散乱した絵の具が行く手を阻む。

『何でこんなに寒いんだ。もう四月に入るっていつのに。』

温はブツブツ文句をいいながら、部屋の真ん中に置かれている大きなストーブのスイッチを入れた。

数十秒後、ストーブはブーンとうなりながら、暖かい空気をはきだし始めた。

温はストーブの前に立って手を温めていたが、やがて机の上に置かれた筆とパレットを手に取ると、書きかけの絵の前に座った。

朝の静寂の中、温は絵の世界にのめり込んでいった。

*

一時間ほど続いた温の静寂は、突然の派手な音によって破られた。

背後で、どしんと大きな音がしたかと思うと、かすれたうめき声が

聞こえた。

驚いて振り向くと、積み重ねられた椅子の奥に、赤いものが見える。

さらに、目を凝らすと小麦色の長い手足が床にだらしなくのびている。

赤いものは彼の髪の毛だ。

『志野？いたの？』

『いちゃ悪い？』

志野と呼ばれた少年は、不機嫌そうに体を起こした。横には、いくつかの椅子を組んだ簡易ベットが崩れている。

『いや、そうゆうわけじゃなくて……。お前いつからいたの？』

志野の寝起きの悪さには慣れている温は、刺々しい言葉も気にしないせず、受け流した。

『一昨日位。』

志野はめんどくさいそうに口を開いた。

『一昨日？』

温はあきれてため息をついた。

よくみれば、志野の着ているブルーの半袖のＴシャツには、ひどく汚れているし、トレードマークの赤毛はくしゃくしゃだ。

それに・・・Ｔシャツ？？志野着ているのは半袖のＴシャツだ。長い手足が剥き出しになっている。

まったく、見るだけで寒い。

温は顔をしかめた。それに、もう一つ心配なことがある。

『志野、もしかして一昨日から何にも食べてない？』

案の定、赤毛の少年は首を縦に振った。志野は放っておくと、食べるのを忘れる癖がある。

『俺、朝ごはん買ってくるから。』

そう言つて、温が上着をつかむもつとした瞬間、志野が窓の方に顔を向けた。

『新入部員だ。』

志野は呟くと、窓を大きく開いて外を見下ろした。

『へ？何？』

温も窓の外を見下ろした。

澄んだ冷たい風が部屋に吹き込んだ。

窓の下を小さな影が駆け抜けていく。栗色の髪が風になびく。

『小梅？』

その色は温のよく知っているものに似ていた。

第三話：転入生

今朝、小梅が鏡を見るのは10回目である。

スカートは紺と白とベージュのチェック。紺色のブレザーにはピカピカ光る金色のボタン。首には真っ赤なりボン。

学校案内を見たときにもかわいいと思ったが、実物はもっとかわい
い。

前の学校とえらい違い。やっぱり、都会だからかな。

鏡に中の自分を見つめた。少し緊張しているようで、顔がこわばっ
ている。

小梅は大きく深呼吸をすると、にいと笑顔をつくった。

今日は特別な日。

『温ちゃん。』

小梅は呟いた。

*

『皆さん、おはようございます。』

背の高い女性教師が、勢いよくドアを開けて入ってきた。高い声が、騒がしい教室に響く。

『おはようございまーす！』

生徒達も負けじと声を張り上げる。

『えーっと、去年いくつかのクラスで日本史を教えていたんで知っている人もいると思いますが、初めての人は初めまして。今日から、このクラス

の担任になりました三上 香苗^{かなえ}です。担任は初めてですが、楽しいクラスになりそうですね。これからよろしく願います。』

『はい。』

茶目つ気たつぷりな声が重なって響く。

『なかなか、美人さんだな。』

挨拶を聞きながら、温は前の席に座っている志野の肩をつついた。

『うん。』

志野は心ここにあらずといった感じた。

絵を描くこと以外に志野が興味を示すことは驚くほど少ない。

人にもあまり執着しない。

まあ、そこがいいんだけどさ。

元来のおしゃべり気質の温は、少しもの足りなさを感じつつ志野から手を離れた。

頭に栗色の髪がよぎる。田舎にいる幼馴染を思い出した。東京にいるはずないんだけど。

そういえば、小梅どうしてるかな・・・。

『おい、温はもう聞いたか？なんか、転入生が来るらしいぜ。』

ぼんやりしていた温の横腹をクラスメイトの保が突いた。

気のいい太つちよの保は友達が多いせいか、ちよつとした情報通だ。

『へえ〜。珍しいね。うちのがつこつて転入生とるんだ？』

『いんや、普通は取らないよ。なんか、試しに転入試験受けさせてみたら、満点近くとつたらしいよ。しかもそのテスト入試より大分難しいんだって。俺なんて、入試でさえ繰り上げ合格だったのにさ。化け物っているんだなあ。』

『そりゃ、すごい。男？』

『いや、女の子だって。』

保の情報の早さには、いつも驚かされる。まだ、転入生が来ることでさえ、だれも言っていなかった。

『なんで、知ってるの？』

『え？俺、山崎のじいさんの茶飲み友達だもん。』

山崎のじいさんというのは学年主任のことだ。齢72で、いつ定年退職してもおかしくない。

けっこう頑固で厳しいので有名なのに・・・さすが保である。

一通りの挨拶が終わると、三上先生は大きく手をたたいた。

『はい、注目。今日は皆さんに良いお知らせがあります。実は、わが校はかなりの進学校がゆえになかなか転入生は受け入れられないのですが、

今年は非常に珍しく二年生に転入生を一人迎えることになりました。転入先のクラスはなんと、わが2年B組です。』

教室がざわつく。やっぱり、みんな知らなかったんだな。

一足先に知ってしまったため、温に反応はうすい。

志野も大して興味がなさそうにあくびをしている。

『三沢さん、どうぞ。』

『失礼します。』

ドアがカラカラと開いた。

温の目に見慣れた栗色の頭が飛び込んできた。

『三沢 小梅です。これからよろしくお願いします。』

『こ、小梅？』

温は、口が開いたまま固まってしまった。

『あゝ、やっぱり温ちゃんも同じクラスだったんだ。』

温の視線に気が付くと、小梅はうれしそうに笑った。

*

ぽかんとしている温ちゃん。こころがほっこり温かくなった。

なんにも知らないんだろうな。あたしのきもち。

第三話：転入生（後書き）

私の通ってる高校もわりと偏差値高めなんです、転入生をとるって話は聞いたことないですね。留学してた人が戻ってきたことはあるけど。うーん。こんなことがあるんでしょうか。

第四話：ベストカップル

『小梅ちゃんて、河野の知り合い？』

小梅が席に着くと、隣の席の少女が話しかけていた。

『えっと、温ちゃん・・・じゃなくて河野君とは幼馴染なの。』

小梅は小さめの声でたどたどしく答えた。

『かわいい～。おんちゃんだって。温あつしだから温おんちゃんなんだ。』

『あたし、小藤 美里。よろしくね。』

きれいな子だなと小梅は思った。憧れのサラサラの黒髪ロングに長い睫毛。唇はピンク色。

『美人だなあ・・・』

うつかり、声に出してしまった。

『え？あたし？やだ、小梅ったら正直者。』

美里は、照れもせず、小梅の肩をバシッとたたいた。

『美里～、小梅ちゃんいじめんなよ。』

後ろの席からふくやかな少年が声を掛けてきた。ぺしゃんこの鼻に、笑うと目尻が下がる。いかにも気のよさそうな顔だ。

『なによ、保こそ馴れ馴れしいんじゃない。小梅ちゃんなんて。』

美里は、声の主に負けじと言い返す。

『いいじゃん、別に。お前こそ、怪力なんだか気をつけろよ。あ、俺、向井 保ってゆーんだ。よろしく。』

『よろしく、向井くん。』

『保でいいわよ、こんな太つちよ。』

美里は冷たく言い放った。

『ひどいな。それが彼氏に対する言い草?』

保はまんまるの頬をさらに脹らませた。

『ふん、何度でも言ってるわよ。太つちよ。太つちよ。はあ、こんな太つちよが彼氏なんて。』

美里は、わざとらしくため息をついた。でも、なんだか楽しそうだ。

『え? 彼氏?』

ちよつとまって。小梅は耳を疑った。か、彼氏?

もう一度、美里と保を見比べる。美女と野獣っていつでも間違えではない組み合わせ。

『ほら、小梅だつて驚いてるじゃん。まあ、一応、彼氏の保です。』

美里は少し照れくさそうに、彼氏と言った。

赤くなつた美里を見て、小梅はなんだかうれしくなつた。

ちよつと驚いたけど・・・。

『すてきな彼だね。お似合いのカップルだよ。』

小梅は正直に思つたことを言つた。

『小梅ちゃん、最高！良かったな、美里。良い友達が出来て。』

『あんたもでしょ、保。』

美里と保の息の合つたかけあいした後、小梅は口を開いた。

『よろしく、ベストカップルさん！』

＊

『小梅、ちよつと来て。』

休み時間に入ると、すぐ温がやって来た。

小梅は、頷くと温の後に続いて教室を出た。

久しぶりに温ちゃんの中は、前より大きく見える。

背伸びたな、温ちゃん。小梅は、痛みだした胸を手で押さえた。

『なんで、東京にいるの？』

階段の横の人目につかない所に来ると、温はくるりと小梅に向き直って言った。

『うん。一月におじいちゃんが死んじゃったのは聞いてるよね。』

『知ってるよ。くも膜下出血だったわけ。』

『そう、お父さん、おじいちゃんが死んじゃってから元気なくなっちゃって。そしたら、ちようどお父さんの東京本社への移動の話がきてたの。』

お母さんが環境変えようって提案して、東京には、さーちゃんもいるし、ちようどいいかなって言うて。おじいちゃんの土地も全部売っちゃったの。』

土地を売ることになった日を思い出して、涙が滲んできた。おじいちゃんがかわいそうだって、雪江と何度も言い争った。

『小梅。お前、あそこの家にいたかったんじゃない。』

小梅の震える声に気づいて、温は言いかけた。

『もう、いいの。ふっ切れたし。制服かわいいし。それに、今お父さんすっごく元気なの。本社に来て、バリバリ仕事してるみたいで、

忙しくて悲しいこと考える暇ないみたい。』

小梅は、笑ってみせた。

『小梅……。さーちゃんに先週会ったときは何にも言っていなかったのに。』

『ああ、それは驚かせたかったから黙ってもらったの。温ちゃん
のびっくりする顔みたかったし。』

『うん、すごくびっくりした。でも、うれしいよ。やっぱり、お前
が一番気が合うし。』

『さーちゃんへの近道だしね。』

小梅は付け加えた。

『まーな……。って、うるせーよ。』

憎まれ口が心地よく小梅の耳に響いた。

第五話：女友達

『この等式を証明してもらおうかな。じゃあ、三沢。』

禿げ上がった頭に恰幅の良いお腹。数学教師の谷口はうすい目をさらにうすめると、名簿を眺めると言った。

『はい。』

小梅は立ち上がると、黒板に長い証明式をスラスラと書いた。チヨークを動かす手はよどみなく、迷いが感じられない。

『うん、正解。』

谷口が満足気に頷く。

おお〜という声が、教室のあちこちであがる。

*

『小梅ちゃん、一緒にお昼食べよう。お弁当持ってきた？』

昼休みにはなると数人の女子が小梅の席やってきた。美里も一緒だ。

『まだ、家の中がごたごたしてて、お弁当持ってきてないの。学食

があるって聞いたんだけど。』

『私も。お母さんが、新学期作るのめんどくさいなんて言い出してさあ。じゃあ、学食いこう。』

背の高いショートカットの少女が、さわやかな笑顔を浮かべて言った。潔く日焼けした肌が、さっぱりとしたい印象を与えている。

『あ、待って。学食行くなら、デザート買いたいから財布持つてくる。』

隣に立っていた小さくて丸っこい体型の少女が慌てたように、自分の席に戻っていく。きれいに切りそろえられたマッシュルームカットが、よく似合っている。

『あんた達、自己紹介くらいしなさいよ。』

美里が、横から口を挟む。

『あの小さいのが日野 華乃子^{かのこ}で、このおっきいのが今井 岬^{みさき}。』

『なんか、気に喰わないなあ。その紹介。』

岬が、不満そうに美里を見た。

*

出来たばかりだというカフェテリアは、生徒でこった返している。なんとか、四人分の席を確保した小梅たちは、椅子の背ににブレザーを掛けた。

食券の券売機の前に並ぶと、美里たちがせき切ったように質問を始めた。

『ねえねえ、編入試験ほぼ満点だったって本当？』

『前の学校で何か部活に入ってた？』

『その髪の毛、地毛？キレイな茶色。』

あまりに矢継ぎ早なので小梅が返答に困っていると、華乃子が慌てて、助け舟を出した。

『ごめんね。小梅ちゃん。私たち転入生なんて珍しくからついつい興奮しちゃった。ゆっくりでいいよ。』

育ちの良さそう笑顔と優しい言葉に、小梅はほっとして口を開く。

『ううん。大丈夫。えーと、試験は結果もらっていないから分からないんだ。でも、そこまでは出来ていないと思うよ。英語とかすごく難しかったし。』

『いや、うちの英語のテストは30点取ればいいっていわれてるからな。全部埋めた？』

『うん、一応。』

『ええ〜?』

3人の声が重なる。

『ちなみに問題用紙って何枚だった?』

『10枚だったと思うよ。』

『10枚!?!』

3人は驚きを通り越して呆れた顔した。

『やっぱり、プリンの奴、頭がおかしい。』

岬がぼやく。

『プリン?』

『うちのがつここの英語教師。あ、ほらあいつだよ。端っこの席で、プリン食べてるオヤジ。』

岬があごでしめす。

『山路先生っていつもプリンを食べてるのよ。』

華乃子が説明を加える。

『だから、あだ名はプリン。』

美里が締めくくった。

『でも、ホントに頭良いんだね。さすが、河野の幼馴染。あ、これはさっき美里から聞いた。』

岬が話を元に戻す。

温ちゃん。小梅の心に波が立つ。

『河野君で、学年で一番なのよ。顔だってかなりのイケメンだし。かなり、もてるのよ。幼馴染だなんてきつと羨ましがられるわよ。』

華乃子は心なしか、楽しそうに言った。

『華乃子も1年の時は騒いでたもんね。この子ホント面食いだから。』

美里がため息まじりに口を挟む。

『美里が趣味悪すぎなのよ。男の子は美しいに限るわよ。美しい顔には美しい精神が宿る。それにもう、どーでもいいよ。私は好きな人がいる男の子なんて興味ありません。』

おっとりしていて優しくそうな華乃子の顔に、妖しい笑みが浮かぶ。

『ほんといい性格してるよな。これでこんな顔なんて詐欺だよ。』

岬がうんざりしたように言った。

『好きな子？』

『そうなのよ。どんなにかわいい子がいても、俺には好きな子がいるからの一点張り。あ、もしかしてそれって小梅ちゃん？』

華乃子の瞳がきらりと光る。

『違うよ。多分、それはあたしのお姉ちゃん。』

口にするのが辛い。小梅は傷む胸を押さえながら答えた。

『へえ、お姉さんかあ。何歳なの？美人？』

華乃子が鼻息荒く前に乗り出す。

『こらこら、やめなさいよ。ごめんね、小梅。華乃子の悪い癖なの。』

美里が、華乃子の小さな頭を押さえつけた。

『え、ホントだ。私ったら。ごめんなさい。』

申し訳なさそうに、華乃子は両手を胸の前で合わせた。

『どうせ、明日の校内新聞に難攻不落の「河野 温の想い人」ついに発覚！」なんて見出しにしようと思ってたんだろ。あ、こいつ新聞部の部長なんだよ。』

岬がにやにやしながら、口を挟む。

『うるさいな、岬。あ、そうだ。むしろ、私は小梅ちゃんにインタビューさせてもらいたいな。題名はねえ。』

華乃子は一回、間を置くと美里と岬を見た。ふたりも頷く。

『魅惑の美少女転入生、三沢 小梅ちゃん独占インタビュー！』

3人の声に、周りにいた生徒が振り返った。

『勘弁してください。』

小梅は真っ赤になって、小さな声で呟いた。

第六話：変人？

『小梅は何にする？今日は転入記念にあたし達がおごるよ。』

岬がラーメンのボタンを押しながら言った。

『え、いいよ。これからお世話になるのに。』

小梅は驚いて、首を横に振った。

『いいのいいの。おごらせてよ。うちの学食レベル高いんだよ。何でも好きなもの選んで。』

美里と華乃子も頷く。

『ありがとう。お言葉に甘えようかな。えっと、じゃあとろろそば。』

小梅は自販機のメニューを見ていった。

『お、渋いね。とろろそばと。あ、小梅で最後だ。』

岬がとろろそばのボタンを押すと、赤いランプで売り切れの文字がついた。

『わあ、小梅ラッキーだったね。こうゆーのって得した気分。』

華乃子がうれしそうに言った。

『え、嘘。俺のとろろそばが・・。』

小梅の後ろで、ぼそつと低い声がした。

振り向くと、真っ赤な髪の毛が目に入った。

クラスの人だ。名前なんだっけ。それより、とろろそば食べたかったのかな。悪いことしちゃったな。

『あのーよかったらとろろそば譲りますけど?』

小梅はためらいがちに尋ねた。

『何いつてんのだよ、小梅。秋山、いつもとろろそば食べてるんだよ。譲る必要なし。』

岬が口を出す。

『いや、あたしはどのメニューも初めてだから他のでもいいけど、秋山君?はとろろそばが一番好きみたいだし。』

『ま、小梅がいいなら。ほらよ、秋山。250円。』

『どうも。』

秋山はすでに手に持っていた250円を岬に渡すと、去っていった。

低い位置で、無造作に結ばれた赤い長髪が揺れる。

＊

『さっきのは秋山 志野っていつて、河野君と一番仲がいい子だよ。』

華乃子が、きんぴらをつつきながら言った。

『顔はいいんだけど、学校一の変人だしね。大体、絵にしか興味ないし。』

『ふうん。変人かあ。ちょっとそんな感じ。あ、ラーメンおいしい。ラーメンにして正解だったよ。』

小梅はラーメンを勢いよく啜ると、頬を押さえた。

『でしょ？あたしはこれが一番好き。』

岬が得意そうな笑みを浮かべた。

『華乃子、チーズケーキちょっとちょうだい。あ、そっいえばさっきの続きだけど、部活は何に入ってたの？』

美里がフォークを振り回しながら、小梅に尋ねた。

『美術部だよ。あと、時々剣道部で大会に助っ人として出てたよ。』

『美術部。河野と秋山もだよ。河野はバスケットと兼部してるけど。』

華乃子がピンク色の手帳を取り出すと、そう言った。

『出た、華乃子の情報手帳。うちの学校でも、美術部入るの?』

『そのつもりだけど。』

『じゃあ、入部テスト受けなきゃね。』

『入部テスト?なにそれ?』

小梅は目を丸くした。

『ウチの学校の美術部ってけっこう有名な画家たくさんを輩出して、顧問の指導が行き届くように入部テストで受かった人しか入れないの。形だけだけど、おかげで河野君めあての女子とかはいないのよね。』

華乃子は例の手帳を眺めながら、続けた。

『ええ、何するの?』

『実技テストと顧問の司馬先生との面接。』

『あたし、デッサンの指導ちゃんと受けたことないんだよ。』

『河野君は?』

『あたしの知るかぎりではないと思うけど。』

そうだ、温ちゃん。温ちゃんの中学の卒業制作の似顔絵。あれは、ひどい出来だった。

そんな温ちゃんでも、入れるんだもの。

『じゃあ、大丈夫よ。今日の放課後にも教員室にいつてみよう。』

華乃子はにっこり笑って手帳を閉じた。

第七話：ひまわり

少年は目の前に置いてある小さな種を見つめていた。

5分ほど種を観察すると、筆をとる。

太い筆に黄色の絵の具をべっとりとつけ、キャンバスにぶちまけるように塗った。

少年が今、一粒の種の前にして描いているのは、種ではなくそれから咲くであろう大輪のひまわりである。

キャンバスに向かう彼の姿は、普段の少年からは到底想像出来ない、ひどく荒々しいものである。

『おや、やってみましたか？』

サウナにドライアイスを持ち込んだかの様に、のんびりとした声が美術室に響いた。

少年は顔を上げると、ドアのそばに背の低い初老の男が立っていた。禿げ上がった頭には申し訳程度の短い髪の毛がしがみついている。ぺしゃんこの鼻にジョン・レノンとお揃いの丸い眼鏡をかけている。

『司馬じい。どうしたの？』

少年は生徒の中での男の愛称を呟いた。

『こら、秋山君。いつも言っているでしょう。目上のしかも教師に

対してはきちんと礼節をわきまえること。私がどうゆう人間であれ、少なくともあなたの何倍も生きているんですよ。君より長くこの世界にいる。しかも、教師です。あなたは私を敬うべきなんです。』

老教師の小さな目の中に真剣な意志が宿る。

『はい。すみません、司馬先生。』

志野は素直に謝った。

現代なら教師として問題になりそうな発言だが、志野はこの老教師に好意を持っている。

普段は生徒に対してまで敬語を使うような温厚な教師だが、一度問題が起これば生徒を叱ることに躊躇をしない。

冷静に諭すように叱るところが好きだ。

理解のあるふりをして媚びを売ってきたり過度な馴れ合いを求めたりと、生徒を叱れない教師が多すぎる昨今、ある意味で一番教師らしい教師なのではないかと思っている。

多少問題があっても、自分の考えは曲げない頑固さが必要なのではないか。

志野は人に興味ががないと思われているが、彼にいわせればとって興味を持てる人間があまりにも少ないからである。

『はい。素直でよろしいです。陰でどうゆう風に言おうと構いませんが、私とあなたが向き合っている時は私は教師でああなたは生徒な

んですよ。』

小さな目が糸のようにうすくなった。口元には優しい微笑が浮かんでいる。

厳しさと一緒に外見通りのお茶目な部分も持ち合わせている。

『おっと、そうでした。今日から新入部員が入ることになりました。色々教えてあげて下さい。お待たせしましたね、三沢さんどうぞ。』

司馬はドアの後ろをのぞくと、手招きをした。

『今日からよろしく願います。三沢 小梅です。えっと、秋山君ですよ。』

栗色の髪がふわりと白い首元でなびく。

肌や髪と同じく色素のうすい茶色っぽい瞳が不安気に揺れる。

『うん、よろしく。』

志野は素っ気なく返事をした。

確か、温の幼馴染だ。どうでもいいけど。

『三沢さん、美術部は基本的に自分の好きな活動をしていいことになっているから、自分のペースで好きなように創作して下さい。その都度、聞いてくれれば、私も他の部員もどんどんアドバイスしますからね。三沢さんは水彩画ということですが、何か必要なものがあれば言ってください。』

司馬がてきばきと質問した。

『道具は一応一通り持ってきているので、画用紙を頂ければ結構です。』

『それなら、その戸棚に置いてありますから自由に使ってください。それから申し訳ありませんが、これから職員会議になるので私はこれで。秋山君色々とお願ひします。』

司馬は小梅に会釈をすると、志野に一声掛けて去っていった。

司馬が去ると、再び静寂が訪れた。

小梅は教えられた場所から画用紙をもらい、かばんから筆と絵の具を取り出すと窓のそばの椅子に腰掛けた。

小梅はゆっくりと筆を動かす。

滑らかに優しく。けして急ぐことなどない。

*

どれ位の時間が経ったのだろうか。

小梅は自分の頬に差していた春の暖かな日差しが、赤く染まっていることに気が付いた。

慌てて、教室を見回すと秋山 志野の姿は見当たらなかった。

小梅は片づけをすると、かばんを肩にかけた。

部屋を出ようとすると、ふと隅にキャンバスいっぱい描かれたひまわりがあつた。

小梅は一歩ひまわりに近づいた。

志野がいた時は、後ろから覗かれるのを嫌がる人もいるからと我慢していたのだが、ずっと気になっていたのだ。

絵からは、夏のおいがした。小梅の田舎の夏のおい。土のおいと汗のおいとちよつと火薬くさくて。

絵の中では、時が夏で止まっていた。

小梅の時間も止まった。

*

『三沢さん？まだいたんですか？』

気が付くと後ろに、司馬が立っていた。

『あ、すみません。その、秋山君の作品に見とれちゃって。』

小梅は顔を赤くしながら言った。

『そうですね。彼の作品には圧倒的な世界があります。ただ、ちょっと年寄りの私にはきついですが。』

司馬は愛おしそうにしかし、少し寂しそうにひまわりを見た。

『?』

小梅は不思議そうに司馬を見つめた。

『さ、もう遅いですよ。気をつけて帰りましょうね。』

司馬は話を打ち切るように小梅を外に出して、鍵を閉めた。

『さようなら。』

『さようなら。』

電気を消されて暗くなった廊下を歩いていく少女の背中を老教師は
穏やか目で見守っていた

第八話：朝の会話

汗が額から滴り落ちる。

温は、ロッカーに置いておいたペットボトルを掴むと、ぐいぐいと一息で飲み干した。

タオルで軽く汗を拭くと、Ｔシャツと短パンのまま部室を出た。

思ったより汗をかいてしまったので、授業前にシャワーを浴びたいと思ったのだ。

風立付属高校は大学と同じ敷地にあるため、シャワールームなどいくつか大学生と共同で使えるものがある。

外に出ると、朝のひんやりとした空気が頬を撫でた。

そうだ。

温はシャワールームの行く途中の道を、左に曲がった。

校舎の端に早朝にもかかわらず一つだけ電気がついている教室があった。美術室だ。

やっぱり。

温は、足を速めた。

『おい、ホントもつそろそろ家に帰れよ。このところずっとだろう。』

』

温は、朝が来たのも気づかず一心不乱にキャンバスに向かう少年に声を掛けた。

『温。もう朝？』

志野は、温の声に驚いて振り返った。

『うん、俺は朝練。これからシャワー行くけど、お前もどっ？』

『・・・いこうかな。』

志野は片づけを始めた。

温は志野の描いていた絵を覗き込んだ。

『やっぱり、すごいね。お前は。』

温は感想が上手くいえる方ではない。

おしゃべりな温は、本当に心揺さぶられるものに出会つと黙りがちになる。

志野もそれが分かっているから、温の沈黙を最高の賛辞として受け取った。

『あ、あれって小梅の？』

テーブルの上に画用紙が一枚置いてある。

『そうだと思うけど。昨日入部してきた。なんか落ち着かなくて、昨日はあの子が帰ってから戻ってきて作業始めたんだ。』

『どれどれ。うわあ、変わってねえな。』

小梅の絵を見た温が目を細める。

『ちょっと、見てみるよ。小梅の絵ってあんまり上手じゃないんだけど、昔から妙に人気があるんだよ。』

志野は差し出された絵を眺めた。

何人かの人が描いてある。志野もよく知っている人々。

小梅は転校初日に仲良くなった人を描いたようだった。

手をつないでいるのは、美里と保。

前にしゃがんで座っているのは、華乃子と岬。

それぞれの特徴はもちろん、よくする表情まで会ったばかりとは思えないほど、人物像を掴んでいる。・・といっても志野の知る範囲だが。

絵の奥に赤い髪の人物の後姿が描かれている。

俺？

志野はいつの間にか、身を前に乗り出していた。

『小梅はいつつも人を描くんだよな。おまえと逆。お前が人を描いてるの見たことないもん。』

温はそんな志野に気が付いて、ぽつりと言った。

『偽善者じゃないのか。』

はつと我に返った志野は小梅の絵から目を離すと、わざと怪訝そうに言った。

『お前がそう思ってるなら、いいけど。あいつはそんな奴じゃない。』

温は静かにだけど、はつきりと言った。怒りさえ感じられた。

『お前の好きな子って三沢？』

志野は温の様子で、ふと思いついたように尋ねた。

『ち、ちがうよ。俺が好きな子は、あいつの姉ちゃん。お前も会ったことあるだろ。うちの大学の絵画サークルの人。』

『ああ。』

志野の頭に、髪の高いきれいな女性が思い浮かんだ。

去年の文化祭に来ていたっけ。

あんまり、覚えてないけど。

『ほら、もう行くぞ。もたもたしてたら、HR始まる。』

温は立ち上がると、志野の腕を強く引っ張った。

第九話：姉妹

『小梅。こっちこっち。』

桜は大学生の群れの中できよろしている妹に向かって大きく手を振った。

小梅は姉の姿をカフェテリアのテラスに見つけると、うれしそうに走ってきた。

『さーちゃん、お待たせ。』

小梅は息を切らしながら、言った。

白くてぷっくりした頬が紅く染まっている。

桜は林檎みたいな妹のほっぺに手を伸ばした。

いきなり頬に冷たいものが触れたので、小梅はびくつと震えた。

『あれ、ごめんね。小梅のほっぺだが、あんまりにもかわいいからつい触りたくなっちゃった。』

『うつん、大丈夫。久しぶりだから、さーちゃんの手が冷たいの忘れてた。』

小梅は、幼い子のように温かい手を桜の手の上に重ねた。

『ふふ。小梅は人間ホッカイロね。』

『冬は重宝されるんだけどね。』

姉妹はお互いもう一度目を合わせると、くすつと笑った。

『どう、新しい高校は？楽しい？』

『うん。新しい友達も出来たよ。制服もかわいいでしょ？』

『よく似合ってる。わたし、大学に入った時に付属の高校生になりたいなあって思ったもん。それにしてもさすが小梅ね。転入試験もあっさり受かったやうし。』

『あたしは勉強しかとりえないし……。』

久しぶりにそばで見ると、やっぱり桜はすごい美人だ。

美里と同じで、黒髪のサラサラロング。整った顔立ちに聡明そうな大きな瞳。

大学に入って始めたお化粧も桜の大人っぽさをよく引き出している。

純和風の美人で、小梅とは正反対である。

さつきから男の人達の視線が痛い。

『何いつてるの。剣道だってすごく強いし、絵だって。自慢の妹よ。』

優しいお姉ちゃん。本気で言ってくれていることが良く分かる。

大好きなのに・・・。

温ちゃん。お姉ちゃんはやっぱり素敵な人だよ。

そういえば、おじいちゃんもだ。お姉ちゃんは愛される人で愛すことの出来る人。

あたしとは違う。

『ありがとう。お姉ちゃんもあたしの自慢。なんだか、照れるね。こーゆーの。』

涙を笑いに変えて・・・。

『そーいえば、温君って学年で成績1番なんでしょ？小梅のライバルじゃない。』

『え？そ、そーだね。』

心を読んだようなタイミングで、切り出された温の話題に小梅は動揺しながら答えた。

『次のテストどっちが一番かな？』

桜の瞳はいたずらっぽく光った。

『当然、あたし!』

小梅は勢いよくこぶしを振り上げた。

『よし!それでこそ、さーちゃんの小梅。』

小梅の元気がだんだん戻ってきたので、桜はほっとしていた。

小梅は意気消沈の宗助の相手をよくして、宗助が亡くなった後も祖父の残した土地は自分が守ると息巻いたらしい。

それにひきかえ、自分はどうかろう。

東京の大学に来たのも、目的は勉強にしろ、宗助の愛情を窮屈に思っていたことも理由の一つだ。

結局、相続税も含め、色々な問題から土地を手放すことになったけれど、桜は密かに責任を感じていた。

雪江は桜が気にしないようにと、宗助のことも小梅のことも黙っていたけれど、お葬式での様子を見ればなんとなく予想がついた。

一番気がかりだったのは、小梅のことだ。

三沢家をこよなく愛す繊細な少女が受けた傷が心配だった。

頑固な宗助のことだ、孫から受けた愛情を同じ様に返してやらなかったに違いない。

小梅は一見器用に生きているようにみえるが、絵を見れば誰でも彼

女の繊細さが分かる。

なんだか、他にも悩んでるみたいだし。

小梅は幸せにならなくちゃ。

桜は目の前で、ニコニコしながらパフェをほおばる妹を愛しげに見つめた。

第九話：姉妹（後書き）

明日休みなので、がんばってみました。人って優しい部分と意地悪だったりするい部分もあって、それが他の人の目にどう映るかも相性次第なんでしょうね。

なんだか当たり前のことを書いてみました。学校で毎日そんな場面に出くわします。

余談：入部面接

『あなたの描いた絵を見させていただきました。すばらしいかったです。』

狭い美術準備室で、美術部顧問の司馬 寿男としおと三沢 小梅は向き合っている。

『そんな。わたし、きちんとデッサンを習ったことがなくて自己流なんです。』

小梅は恥ずかしそうに俯いた。

『いや、技術なんていいですよ。あなたの絵は河野君という人の作品によく似ている。いや、絵柄がというわけじゃありませんよ。二人の作品に共通温かさがあって……。いや、わたしは何を言っているんでしょうね。』

今度は司馬の頬が、恥ずかしそうに頬をぼりぼりと掻いた。

『先生すごいですね。わたしと河野君は幼馴染なんですよ。見て育ったものがほとんど同じだから、雰囲気も似るんじゃないでしょうか。』

温ちゃんの作品があたしのに似てる？

小梅は緩んだ頬を必死で引き締めようとした。

『そうか、通りで。ま、しかし表現力や作品の深みは数段あなたの

方が上です。人間を描くのが好きですか？」

『はい。小学校に入る頃にはもう人物画ばかり描いてました。』

『自分の才能にあった選択だと思いますよ。あなたの描く人間は実に現実味があります。』

『現実味ですか？』

『はい。きっと美術部はあなたにとって有意義な場所になると思いますよ。』

『！じゃあ。』

小梅の声が弾んだ。

『美術部へようこそ。三沢 小梅さん。』

老教師の顔に優しい笑みが広がった。

余談：入部面接（後書き）

いつ入れようか悩みましたが、早めに入れました。

第十一話：沈黙の庭

風立大付属高校、通称風校の校舎は二つの棟に分かれている。モスグリーン色の棟が東棟で、クリーム色の棟が西棟である。

屋上はどちらにもないが、二つの棟の間にはおおきな中庭と、それぞれの棟の裏手に小さな裏庭がある。大きな中庭は「中庭さん」などと呼ばれ、噴水などもあり、当然の如くお弁当スポットや憩いの場として使用されているが、問題は二つの裏庭である。

大抵の学校での屋上の使用方法と同じ、つまり呼び出しの場として使われている。

西棟の裏庭は「恋の庭」と呼ばれている・・・つまり告白スポット。ちなみに由来は裏庭の池に鯉が泳いでいことからである。

東棟の裏庭は「沈黙の庭」と呼ばれている・・・つまり気まずい呼び出しのスポット。由来は特別教室や普段あまり使われない東棟は、棟の全体がひっそりとしているので、裏庭も静寂そのものだから。あとは、まあ、双方のいたたまれなさを上手く表現したネーミングである。

以上が小梅が、華乃子の手帳から得た情報だ。

小梅が頻繁に足を運ぶのは、「中庭さん」と・・・「沈黙の庭」だ。もちろん、後者は本人も不本意で行くのだが。

『三沢さんて、河野君とどうゆう関係なの？付き合ってるの？』

小梅の前には、おとなしそうな女の子が泣きそうな顔で立っている。

小梅はため息をついた。転入してきてこの質問に何度同じ答えをしてきただろう。

『まさか。付き合ってなんかないよ。ただの幼馴染。』

言う度に、苦しくて苦しくて胸がつぶれそうになる台詞。まるで見えない縄が小梅の首を絞めているような気がする。

『・・・でも、河野君に告白したら好きな人がいるって言われて。それって三沢さんでしょ？』

『ちがうよ。相手は言えないけど、あたしじゃない。』

まあ、「三沢さん」には変わらないけど。

『そう、教えてくれてありがとう。それじゃあ。』

少女は、うなだれた様子で去っていった。

『はあ。』

小梅は少女が見えなくなると、思わずその場にしゃがみこんでしまった。

漫画みたいは何人もで詰め寄るなんてことはないからいいと思っていただけ、こう何度もこの台詞を言わされるのは精神的に辛い。

温のもてつぷりは昔からだ、高校に入りさらにグレードアップしている。

一昨日も巻き髪の美女に呼ばれたばかりだ。今日の子も、おとなしめだけどころかい子だった。

『温ちゃんの贅沢者。』

小梅は呟いた。温ちゃんの目にはどんなかわいい子も入らない。さーちゃんだけ。

『そつだな。』

ふいに背後から低い声がした。

『え?』

小梅が驚いて振り返ると、ブロンズ像を腕に抱えた志野が立っていた。

『き、聞いてたの?』

『うん。別に聞きたくもなかったけど。出ていく方がもっとまずいと思つて。ここ、近道だからよく使つんだよ。』

『どこから?』

『ただの幼馴染ってあたりから。大変だな。』

志野はそれだけ言うと、さっさと背を向けて歩き出した。

後に残された小梅は、あっけに取られて夕暮れの中ぼんやりと佇んでいた。

恥ずかしいのか怒っているのか。自分の中の感情が分からなかった。

ただ分かっているのは、こんなに志野と話したのは初めてだということと、彼はやっぱりここが「沈黙の庭」だって知らないこと。

思った通りの人だ。

『ふふ。』

いつの間にか重たい気持ちは明るいものに変わり、小梅は笑っていた。

初夏の夕日は空をオレンジ色に染め、小梅の心を温めた。

第十一話：沈黙の庭（後書き）

小梅は人間がとても好きなのです。祖父に対してのトラウマもあるはずなのに、不思議ですね。私は、志野タイプかもしれません。別に、馬鹿にしている訳ではないのですが。

第十二話：思いやり

『ごめん、飯田。あたし今つきあってる人がいるんだ。』

『知ってるよ。保だろ。どこがいいんだよ。調子いいし、なんていうかその・・・。』

『太ってる？』

『そう！』

『・・・。。』

『あいつ、デブじゃん。小藤に似合わないよ。』

『調子に乗らないでよ。保はかつこいいし、あんたより百倍いいやつだよ。人を見下すなんてサイテー、もう話かけないで。』

「恋の庭」に威勢のいい平手打ちの音が響いた。

美里は肩をいからせながら、「恋の庭」を出た。大好きな保を馬鹿にされ、腹が立って仕方がない。

飯田。いい奴だと思ってたのに。

美里は立ち止まると空を仰いだ。と、背後で話し声がある。

『やっぱり良くないよ。こーゆーのは。』

『何言ってるのよ。こんなおいしいシーンが見られるなんて来たかいあつたじゃない。』

『しかし、美里のやつ派手にやったよなあ。飯田の顔見たかよ？』

声の主は全員分かつている。美里は、息を吸い込んだ。

『あなたたち！』

美里の良く通る高い声が響いた。

一瞬、静寂が訪れしばらくすると、背後の茂みから三人が現れた。

『う、ごめんね。』

最初に声を発したのは、新メンバーで栗色の髪 of 少女、小梅。顔を真っ赤にして、謝っている。

『学校一の正統派美女、小藤 美里が告られた現場を押さえに来たの。いやあ、貫禄あつたわ。』

悪びれもせず、目をキラキラさせながら話しかけてくるのが日野華乃子。名家のお嬢様で、見た目もおっとりしとやかなのに、中身は一癖も二癖もあり、まだ底知れずの恐ろしさを含んでいそうだ。

『悪かつたよ。でも、スッキリした。美里ホントかつこよかったよ。』

そう言つて、ニカッと分かつた短髪の少女は、今井 岬。

『そうそう、スカッとした。』

小梅と華乃子の声が重なる。

『どうも。』

美里は何か腑に落ちないけれど、丸め込まれてしまったように怒ることが出来なかった。

『でも、あいつホントやな奴。飯田！』

華乃子は苛立たしげに、手帳を片手にシャーペンをカチカチ鳴らした。

『ほんとしょーもないよな。』

岬も鼻息荒く同意した。

『いーよ、もうどうでも。』

美里はため息交じりで言った。

よくなんかない。保のことを言われた時、すごく悲しかった。

美里は唇ときつく噛んだ。その時、澄んだ声が響いた。

『保君で、すごくかつこいいよね。外見だって癒し系でかわいいし、それに心がすごく強そう。目がしっかり周りや相手を見てて、みんな保君と友達になりたいと思うちゃうの。美里ちゃんから保君に告白したんでしょう？』

小梅は背の高い美里を見上げた。

美里は自分の目の奥がカーッと熱くなるのを感じた。

なんで、分かるんだろう。

そうだ。最初に好きになったのは、美里からだ。席替えて三回連続で隣になり、話をよく聞いてくれた。何にも言わないけど、良い話の時は笑ってくれて、悪い話の時は黙って聞いていてくれた。

好きで好きでたまらなくなつて告白したのは高1年の秋。保も同じ気持ちだと言ってくれたときは泣くほどうれしかった。

涙が美里の頬を伝い、嗚咽が漏れる。

『あ、あたしね。悲しかったの。なんで、飯田なんか保のこと馬鹿にされて。太っているのだって、小さい頃に両親が離婚問題でもめたストレスからだし。』

『うん、そうだね。』

小梅は優しく頷いた。

『悔しい、あたしすごく悔しい。』

言葉が急ぎ切ったように、美里の口からあふれ出す。

悔しい、悔しいと美里は何度も繰り返した。

小梅はそんな美里を黙って見ていたが、やがて口を開いた。

『うん。でもね、保君は美里ちゃんが思ってるより、気にしてないんじゃないかな。こんなにきれいで優しい彼女がそばにいるんだもん。幸せだよ。』

小梅の茶色い瞳の中には強い自信が宿っていた。

『そう見える？』

美里はしゃくりあげた。

『うん。そ・・。』

『そーだよ！』

明るい声が重なり、小梅の声をかき消した。

『ちよつと小梅ったら、おいしいところ独り占めはだめよ。』

華乃子が小梅に腕を回す。

『そうだぞ。それに美里だって言ってくれなきゃ。あたし鈍感なんだから。』

岬が小梅と美里の肩に手を伸ばす。

美里は息が楽にできるようになった気がした。

『保ったら、うざいくらい幸せそうよ。保って顔は微妙だけど、な

んか美里と一緒にいるとかっこよく見えるのよね。』

『ちよつと、華乃子。うざいって言うていいのは、あたしだけよ。それに微妙とは何よ。』

美里が怒ったように口をとがらせた。

大きな瞳から流れていた涙はもうとっくに乾いてた。

*

なんで、いつもこんな場所に出くわしてしまうんだろう。

小梅たちから少し離れた場所で、志野は苦い顔をしていた。

昨日は東棟を通って気まずい現場に出くわしたから、今日はわざわざ西棟まで回ってきたのに。

志野は自分の運の悪さを呪った。

結局、美里が泣き出したところから、その場を動けず、ずっと待っていたのだ。

ようやく、少女たちが動き出したのを確認すると、志野も歩き出した。

美里にも保にも興味はない。ただ、なんとなく、小梅の言葉がいつまでも耳に残っている気がした。

そうなんだ。大切な人の気持ちを何もかも推し量って守ってあげて必要なんてないのだ。

小梅にも大切な人がいるのだろう。なんとなくだけど、ふと思った。

志野はなんとなく重くなった足をゆっくり進めた。

第十二話：思いやり（後書き）

志野の心が動き始めました。多分、ものすごいゆっくりだとは思いますが。

第十三話：彼の片思い

思い出すのは、熱い額に乗せられたひんやりと冷たい掌。一晚中ついでいてくれた。

目を覚ますと、優しい笑顔があつて、その人が俺の一番になった。

五歳の冬休み、肺炎にかかった。熱ぽかったのに、小梅と裏山で遊んでいたら雨が降ってきて、気づいたら病院のベッドの上だった。

なんとなく、覚えているのはずっと頭に乗せられた冷たい手だけ。

単純だつて、笑われるかもしれないけれど、別にいいだろう。男つて案外ロマンチストなんだ。

ずっと彼女を見てきて、気持ちはどんどん膨らんでいる。

東京の高校に来たのも彼女のそばにいたいから。なるべく近くにいたいからわざわざ、付属の高校を選んだ。

彼女は、俺を弟みたいにしが見てないみたいだけど、高校を卒業したら告白するつもりだ。中学も高校も入れ替わりで卒業していつてしまったから、一緒に大学生でいられる1年間、俺の気持ちを知らせてもらいたい。幸い、大学も同じになるだろうし。

『小梅！温君！こっちこっち。』

風立大学の正門の前で、桜が手を振っている。

『さーちゃん、おまたせ。さあ、行こう。』

小梅が桜の手を取る。

『今日、掃除当番でさ。待っただろう？』

あとから、追いついてきた温も隣に並ぶ。

『大丈夫よ。それより、お母さんが待ちくたびれてるかも。温君が来るって言ったら、すっごく喜んでたもの。今日は御馳走にするって。』

桜は小梅の肩についた糸屑を取ってやりながら、にっこり笑った。

『ホント？俺ってモテモテ。雪江さんは甘いもの好きだから、ケーキ買っただろうか。』

温も笑いを返す。上手く笑えただろうか。久しぶりに桜の顔を見て、かなり緊張をしている。

『はい。あたしはチベットのモンブランがいいです。』

そんな温の気持ちを知ってか知らないのか、小梅は勢いよく手を挙げると、東京に来てからご執心のケーキ屋の名を上げた。

＊

『まあまあ、あつくん。背が伸びちゃって。』

雪江は温の顔を見ると、うれしそうに懐かしい笑顔を浮かべた。

1年ぶりだが、まんまるの体型も、サザエさんを意識したかのような髪型も変わっていない。

『雪江さん、久しぶり。ちょっとやせた？』

『やだ、あつくんたら。褒めてもなんにも出ないわよ。さあさ、そんなところに立ってないで入って頂戴。お父さんも今日は早く帰ってきてるのよ。』

雪江はそう言うと、温の手を引いてた。

『おお、温君。久しぶりだね。元気だったかい？』

温たちが居間に入っていくと、テーブルに座って新聞を読んでいた明が顔を上げた。笑うと眼鏡をかけた顔が、くしゃっとつぶれる。

『うん。明さんも元気そうだね。隣座つてもいい？』

そう言いながら、温は明の隣に腰かけた。温と明は昔から妙に仲が良い。普段、二人の娘とおしゃべりな妻にかこまれている明は温といるとほっとするようだ。小梅に話を聞いて、少し心配していたが、確かにずいぶん痩せはしたが表情は明るいので、安心した。

『いや、久し振りに名前で呼ばれると、ドキドキするね。名前を呼ぶのは、温君と・・・親父くらいだったから。』

口に出した後、明の顔が少し曇る。

『・・・お悔やみ申し上げます。』

温はうつむくと低い声で言った。嫌なことを思い出させてしまった。自己嫌悪で吐きそうだ。

『やだ、お父さんたら。やだわ、年を取ると暗くなっちゃって。わたしはあつくんに名前と呼ばれると若返った気がして、気分がいいのよ。おばちゃんなんて呼んでくる子は苦手なのよ。わたしはあなたのおばちゃんじゃないわなんて思って。ふふふ。』

不穏な空気に気がついた雪江が明るい声で割って入った。

『そうだね。私も気分がいいんだ。だから、温君といるとほっとするのかねえ。』

明も顔を上げて、例の笑顔で笑った。

『なんだか、俺って告白されてる？だめだよ二人とも。結婚相手も前で。』

ほっとした温は、おどけた声を出した。

『ははは。』

『まあ、ふふふ。』

温の台詞に顔を見合せて笑う二人を温はうれしそうに眺めた。

本当に良い両親だ。こんな二人だから、さーちゃんと小梅みたいな子が育ったんだ。

『ずい分楽しそうね。お母さん何か手伝うことある？』

淡いピンクの部屋着のワンピースに着替えた桜が居間に現れた。普段、桜は自分のアパートに住んでいるが、この家にも頻繁に出入りしているため、部屋があり洋服なども置いてある。

『あ、そうだ。これ、お土産。俺もなにか手伝うことある？』

温は出しそびれていたお土産のモンブランの箱をテーブルの上に置いた。

『まあ、ありがとう。そうね、食器を出してもらいましょうか。』

温と桜は食器戸棚の前に並んで立った。高校に入り、背の伸びた温は桜より頭一つ分大きい。

『さつきはありがとう。今日は、温君が来てきてよかったわ。』

桜は大皿を手にとると、温を見上げた。まっすぐ向けられた大きな瞳に温は思わず、目をそらした。

『見てたの？俺、明さんに嫌なこと思い出させてしまった。』

温はうつむいた。情けないし、恥ずかしい。

『そんなことないわ。お父さん、やつとおじいちゃんのことを意識しないで口に出せるようになったの。それに笑っていたわ。ありがとう。』

桜は、笑って温の肩をぽんと叩いた。

『あれは、雪江さんのおかげだよ。』

そういうと、温はしょうゆ皿に手を伸ばした。

叩かれた場所が熱い。普段はわりとおしゃべりの温も桜の前では、うまくしゃべれない。

『そうかも、でもありがとう。』

桜は微笑んだ。

『うん。』

温は顔が赤くなるのを感じた。

第十三話：彼の片思い（後書き）

温と小梅の片思いをそれぞれ1話つつ書こうと思います。

第十四話：彼女の片思い

温ちゃんが好き。さーちゃんが好き。その気持ちに嘘はない。今までも。そして、これからも。

温ちゃんへの「好き」が、さーちゃんや他の皆へのものとは違うことに気がついたのは、小学校の四年生の時だ。

その頃、あたしは、元々好きだった絵を描くという行為にさらにはまってしまって、毎日狂ったように絵を描いていた。学校が終わると、友達の誘いを断ってわき目のふらず家に帰り、筆を握っていたし、休み時間も大好きだったドッチボールやゴムとびに参加せず、一人で美術室に籠って、絵に没頭していた。もちろん、急に付き合いの悪くなったあたしを、非難する友達も少なくなかった。今思えば、なぜ、周りにそんな風に思われて平気だったのか自分でも分からないが、その時のあたしは、本当に全然気にならなかった。

でも、そんなある日事件が起きた。前日、荷物が多かったので、珍しく絵の具セットを学校に置いて帰ったあたしは、美術室に急いでいた。途中で、クラスの女の子達が集まっている横を通り過ぎた。あたしを見て、女の子達は小声でクスクスと笑った。なんだろう。少し嫌な予感がして、足を速めた。結局、美術室に絵の具はなかった。教室にもロッカーの中にも。必死になって、探したけれど見つからなかった。ヒソヒソ声に囲まれて、とうとうたまらなくなって、教室を飛び出した。

頭がぐるぐるん回っていて、美術室にも行きたくなくて、どこに逃げればいいのか分からず、気が付いたら校庭の端っこにある栗の

木の前に立っていた。幹に寄りかかると、やっと落ち着いてきた。あたしは、足元に落ちていた短い枝を拾い上げると、校庭の砂の上に絵を描き始めた。灰色の砂の上に次々と現れるクラスの子の顔。教室で見たあの見たこともないような悪意に満ちた顔。心に闇が、広がってしまったように。あたしは描いた。しゃがみこんで必死に枝を動かした。後ろから、聞きなれた優しい声が響いた。

名前を呼ばれ、後ろを振り向くと、温ちゃんが立っていた。ホコリだらけで、頭に蜘蛛の巣を乗せている少年の手には、あたしの絵の具セットが握られていた。何があつたのか一瞬で、悟った。

『帰ろう、小梅。その絵は残しておいたほうがいい。本当に醜いね。皆まるでクルエラみたいだ。』

それだけ言うと、温ちゃんはあたしの手を強く引いた。

夕焼けで空や町が真っ赤に燃える中、温ちゃんと手をつないで帰った。温ちゃんは何にも言わなくて、それが心地よくてゆっくり歩いた。ふと、思い出して聞いてみた。

『クルエラって百一匹ワンちゃんのクルエラ？』

『え？ああ。そうだよ。まあ、リトルマーメイドのたこババアにも似てるな。』

『アースラーでしょ。』

『そうそう。それ。』

つないだ手は温かくてちょっと胸がときどきして、そのとき感じた。

ああ、あたしって温ちゃんが好きになったんだ。

どちらかといえば、もうすでにずっと好きだった気もした。どちらにせよ、あたしは恋に落ちたのだ。

*

『そうかも、でもありがとう。』

『うん。』

小梅が、お茶を取りに台所に行くと、食器戸棚の前で、桜と温は、肩を並べて仲よさそうに話していた。

『……………』

小梅は何もいわず、その場をあとにした。

さーちゃんを見るときの温ちゃんの目は熱を帯びている。さーちゃんのこと大好きですって、瞳が、顔が、語る。

胸が、チリチリと痛む。

気をつけなきゃ。もしかして、あたしも温ちゃんの前であんな顔し

てるのかな。どうしよう。ばれたらおしまいなのに。

『そばにいらなくなっちゃう。』

半開きのドアから明るい光と雪江達の笑い声が漏れる居間を、一気に通り過ぎた。階段を駆け上がり、真っ暗な自分の部屋に飛び込むと、ベットに身を投げた。嗚咽が漏れないよう、枕に顔を押し付けると、小梅は目を閉じた。

第十四話：彼女の片思い（後書き）

割と暗めです。小梅には、ちゃんと幸せになってもらいたいですね。いじめは嫌いです。まともな神経なら出来ないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4634d/>

リトルプラム

2010年10月21日02時15分発行